

不可視化される「生きづらさ」

—脱毛症当事者女性へのインタビュー調査から—

聖心女子大学大学院 社会文化学専攻
博士後期課程 3年 吉村さやか

1. 目的

本研究の目的は、脱毛の問題を医学の領域の問題に押しとどめることなく、社会的に考察する意義を提示することである。本報告では、脱毛症当事者女性の語りから、女性の「髪」の喪失をめぐる問題経験を可視化する。その作業を通して、対処戦略としてのウィッグの着用の問題性を指摘する。

研究の背景として、第一に、これまで女性の「髪」の喪失という問題が社会学の領域において論じられることはほとんどなかったことがある。本報告では、これまでクレーム申し立てという対処法をとることなく、その存在や苦しみが社会的に不可視化されてきた脱毛症当事者女性を研究の対象とすることにより、『問題』を経験している人たちの訴えや存在が認知されず、まさに不可視化されていることが『問題』であるような経験の過程」[草柳 2004 : 86]に注目したい。第二に、心理学研究を中心として脱毛症当事者女性のウィッグの着用による QOL の向上に関する報告がなされ[Van der Donc et al.:1994]、日本の医療現場においてもウィッグの着用が併用療法のひとつとして推奨されている一方で[荒瀬 : 2010]、ウィッグの着用による新たな問題経験の検討はいまだなされていない。そこで本報告では、ゴフマンの「印象操作」[Goffman:1964]を分析の枠組みとして、ウィッグの着用がそのような側面ばかりではないことを提示する。

2. 方法

分析の対象とするのは、2012年9月から2013年3月までの間に行った禿頭の女性4名へのインタビューである。対象者はいずれも「円形脱毛症を考える会（ひどりがもの会）」の女性会員で、現在もウィッグを着用して生活している。同会会報紙に研究の目的を明示した上でインタビュー協力者を募り、レスポンスのあった会員を対象とした。聞き取りにかかった時間は1時間から2時間で、本人の許可を得てICレコーダーに録音し、のちほど文字起こしした。対象者の年齢は20代から30代であった。

3. 結果

分析の結果、脱毛症当事者女性によって語られる問題経験は、ウィッグの着用によって生じるものであること、さらに、それでもウィッグを着用し続ける背景として、ウィッグの着用というパッシングへの定位家族ならび配偶者などの「親密な人々」の関与が明らかとなった。

4. 結論

脱毛症当事者女性の「生きづらさ」の背景に、パッシングとしてのウィッグの着用による「髪」の喪失の不可視化があるが、女性性の文化的表象としての「髪」の喪失と、その対処としてのウィッグの着用による喪失の不可視化が、当該女性の「生きづらさ」の二重構造になっている。

文献

Goffman, Erving 1963 *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall.
石黒毅 (訳) 『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』 せりか書房 1970.
草加千早 2004 『「曖昧な生きづらさ」と社会——クレーム申し立ての社会学』 世界思想社。